

完了報告書

今後の「地域包括ケアシステム」構築を考える

所属機関：公益財団法人 神戸国際医療交流財団

申請者名：後藤 章暢

助成対象年度：2015年度後期

提出年月日：2016年6月24日

(感想)

昨秋からスタート致しました財団主催の医療経営講座ですが、今回の「今後の地域包括ケアシステム構築を考える」と題した研修会で6回目になります。研修会当日は、週末にも関わらず、医師・看護師・コメディカル・介護士・その他の医療関係者・大学医学部生・一般市民の方など、約170名の参加者にご来場頂きました。



当研修会は、地元神戸の当財団の賛助医療機関でもある、地域包括ケアシステムの構築に実際に取り組んでいる医療法人昭生病院より後援を頂きました。

冒頭は、公益財団法人神戸国際医療交流財団・代表理事 後藤章暢氏から開会の挨拶があり、一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会・理事 小野沢滋氏より「これからの高齢化の進展 私たちは何をしたら良いのか？」というタイトルで基調講演を行った。

ここ神戸でどれだけ高齢化が進んでいるか分析頂き、高齢患者の診療までは病院で対応可能ですが、その後のアフターケア・介護といった、終末ケアにいたるまでのトータルサポートを病院単独で実施することは不可能です。そのため、病院を核に地域が包括してケアシステムを構築することで、地域全体で高齢者をケアする時代に突入しています。つまり、介護も家族から社会へと移り変わってきているのです。今後は、地域包括ケアシステムを構築していかなければ、今の東京のように孤独死の急増などの高齢化によって引き起こされる社会問題が解決されることはありません。ゆえに、地域包括ケアシステムの構築に対して、医療関係者だけでなく、地元の市民の方にも真剣に向き合って考えることが重要になります。

以上のように、講師の小野沢氏より地域包括ケアシステムの構築がなぜこうまで重要視されているのかといった導入部分を説明して頂き、次に、事例発表として、昭生病院・院長 和田義孝氏より、「病院を核とした地域包括ケアシ



システム構築の取り組み」というタイトルで神戸市地元の昭生病院の実際の地域包括ケアシステム構築の取り組みを紹介して頂きました。この事例発表の中でも、今現在どれだけ地域包括ケアシステムを構築し機能させることが重要であることかについて述べられ、昭生病院が居宅支援サービス・訪問看護ステーション・訪問介護ステーションといった関連施設を充実させ、在宅医療を中心に地域全体を巻き込んで高齢者のケア体制構築に取り組んでいる実績なども拝聴



でき、医療関係者の中には、地域包括ケアシステムの中での自院の立ち位置を認識し直し、ケアシステムの構築の一助となるよう自分たちができることを取り組んでいきたいし、それこそが自院が生き残る道だといった意気込みを語って頂いた方もおられた。実際医療行為者側にとっては非常に実務的なレベルで参考になる事例発表内容だったと思います。

最後に、「神戸発 これからの日本の医療」というテーマで、パネラーに小野沢氏、和田氏になって頂き、会場の方からの質疑や問題提起をもとに神戸に限らず、これからの日本の医療について熱い談義が繰り広げられました。



18時15分に開始し、研修会の終わる20時30分までの、時間にすればわずか2時間強でしたが、全ての参加者にとって、今後の地域包括ケアシステムをそれぞれの視点に立って考える機会にめぐりあえた内容の濃い、有益な研修会になったのではと思います。助成を頂いた公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団、後援して頂いた医療法人昭生病院と神戸市を始め、この研修会に関わった多くの方々に感謝の意を表して今回の研修会の完了報告とさせていただきます。

助成：公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団